

ヨハネによる福音書15章12-27節 「遣わされた者たちに宿る愛」

1A 互いの愛 12-17

1B 命を捨てる友の愛 12-15

2B 遣わされて残る実 16-17

2A 世の憎しみ 18-25

1B 世から選び出された者 18-20

2B 知って迫害する者たち 21-25

3A 聖霊の証し 26-27

本文

ヨハネによる福音書 15 章を開いてください。午前礼拝で前半部分、1-11 節まで見てきました。それでその続き 12 節から最後までを見ていきたいと思います。さっそく、本文に入ります。

1A 互いの愛 12-17

1B 命を捨てる友の愛 12-15

12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

イエス様は、弟子たちと今、最後の過越の食事の場からゲッセマネの園のほうに向かっていきます。そこで、おそらく神殿の門に彫刻されている、ぶどうの木から、「わたしがぶどうの木で、あなたがたが枝です。」と語られました。そして、「わたしに、とどまりなさい。」と語られます。1 節から 11 節までは、弟子たちと主イエスご自身との関係を教えていました。イエス様につながること、留まっていることです。主のいのちにつながっていて、自分が留まることによって、今度は主ご自身が留まってくださり、その命から出てくる実を結ぶことができます。

そして、主は 9 節で「わたしの愛にとどまりなさい。」と言われました。御父が御子を愛する愛があり、その愛をもって弟子たちを愛されました。その愛に留まりなさいと命じられています。その愛に留まるには、イエス様の戒めを守ることです。この愛について語られました。そして今、12 節から 17 節までに、その愛を互いに向けなさい、互いに押し流しなさいという命令に移っています。主は、イスカリオテのユダが去った直後に、お語りになりたかったことに戻っています。13 章 34 節で、「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と言われていました。

これが、私たちに対する使命です。それは、愛の共同体を建て上げることです。困難の中にい

て、共同体から離れようとしていたユダヤ人信者に対して、ヘブル人への手紙の著者はこう励ましています。「10:24-25 また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」愛と善行を促す、集まりをやめたりせず励まし合うということです。これが、主が来られる日が近づいている困難な時だからこそ、やって行きましょうという呼びかけです。

ここで大事なものは、愛のつながりの連続です。父が子を愛されました。子が父の愛によって、弟子たちを愛されました。弟子がイエス様に留まることによって、今度は父と子が弟子たちの内に生きて下さり、その愛をもって互いに愛し合います。ですから、愛するということは、全く自分たちの内にあるものではなく、天からの賜物なのです。御父と御子との親しい交わりにあって、その中で与えられる御霊の愛なのです。私たちの役割は、愛の御霊にいかに従順であるか、導きにしっかりとしたがっているかどうかということであり、信仰が試されます。

13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

キリストが他者のために死なれる、このことをもって神が愛を示されました。「ロマ 5:7-8 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」神が行われたのは、ご自分に反抗している者たちのために、それなのに死に渡すほどであったということです。正しい人のためにも死ぬことはないし、善良な人のためにならもしかしたら誰かが進んで死ぬと申し出るかもしれませんが、罪人のために、キリストが死なれました。

しかし、ここではイエス様は「友のためにいのちを捨てる」と言われます。どうしてか？と言いますと、主はなんとご自身を弟子たちの友とされるからです。弟子たちの仲間において互いに愛する模範を示すために、ご自身を彼らの友とされて、その中でご自身が死なれることを語られているのです。その模範によって、私たちが友のためには死ぬという姿勢をもって互いに愛し合いなさいと命じられています。ヨハネは第一の手紙で、このことを教えています。「Iヨハ 3:16 キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」

14 わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。

主が何度となく、わたしの戒めを守るなら、わたしを愛する。わたしを愛するなら、父にも愛され、わたしを現す。父と子が、その人のうちに住む、と約束されていました。その愛の中で、イエス様は弟子たちを「友」と呼ばれます。

聖書には、神が、ご自分のしもべを「友」と呼ばれた人物が出てきます。ユダヤ人には、父祖として敬うアブラハムです。アブラハムが、主なる神に対して「友」と呼ばれています(Ⅱ歴代 20:7、イザヤ 41:8)。その友であることの特徴は、自分のことを隠すことなく知らせることです。主が、アブラハムに、彼は強くだいなる国民になる祝福されること。そして、ソドムとゴモラに裁きを行われることをアブラハムに伝えられました。「創 18:17 わたしは、自分がしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」そして、モーセも神の友とされました。「出エ 33:11 主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。」

イエス様は弟子たちに、この恵みの特権をお与えになっているのです。主は、弟子たちも気づかないぐらいに、大いなる恵みをもってご自分を彼らの友とされました。天の御国の奥義を弟子たちに知らせた時に、こう言われました。「マタ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」

ただ気を付けたいのは、イエス様が恵みによって私たちが友と呼ばれるのであって、私たちが主を主とする、しもべの姿勢を取ることに、何ら変わりありません。イエス様を、ペテロが、生ける神の御子キリストであると告白した後に、ペテロを祝福しましたが、主が、ご自分がこれから殺されると告げられた時に、イエス様を脇に連れて、そんなことがあってはならないといさめました。すると主は、「マタ 16:23 下がれ、サタン。」と言われましたね。そういった意味での友では、ありません。あくまでも、主が一方的に私たちが友と呼ばれる、その愛と恵みです。

使徒たち自身は、自分たちを一貫して「しもべ」と呼びました。「ロマ 1:1 キリスト・イエスのしもべ、神の福音のために選出され、使徒として召されたパウロから」「Ⅱペテ 1:1 イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから」「ヤコ 1:1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが」「ユダ 1 イエス・キリストのしもべ、ヤコブの兄弟ユダから」「黙 1:1 そしてキリストは、御使いを遣わして、これをしもべヨハネに告げられた。」しもべ、という言葉で使われているギリシア語はデウーロスというもので、奴隷の中でもガレー船を漕ぐような下級奴隷です。まったく自分に権利のない奴隷です。使徒たちは、主イエス・キリストに遣わされるということが、どれほどの大きな恵みであるかよく知っていたので、バプテスマのヨハネと同じように、靴の紐を解く値打ちもないとみなしていました。

2B 遣わされて残る実 16-17

16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。

主は、互いに愛し合いなさいと命じられましたが、その共同体はイエス様から遣わされることによって、世に広がっていきます。彼らが使徒として任じたことをイエス様はここで、明言しておられます。第一に、「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選」んだということ。当時、ユダヤ教のラビについていく弟子たちは、どのラビに付いていくのかを自ら選んでいました。しかしイエス様の場合は特異でした。ラビであるイエス様が、弟子たちを選ばれていったのです。イエス様が呼びかけられ、彼らはその呼びかけに応答してついていきました。

ここは、キリストとその弟子の間にある、非常に重要な関係です。イスラエルの民自体が、自分たちがどうだとか、そういったことは全く度外視して、自分たちは選ばれているということを認識しています。パウロは、イスラエルについてこう言いました。「ロマ 11:28-29 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。」イスラエルがなぜ、今に至るまで、その民族性と国を保っていることができるのか？二千年近くも祖国を失っていたのに、その間、離散の地で苦難を受けてきたのに、今にも諸国民に証しを続けていることができるのか？それは、彼らが神を選んでいるのではなく、神が彼らを選ばれたからです。

おそらく、イスカリオテのユダは、イエス様に選ばれたはずなのに、自分で選んだのだとしたのだと思います。それはあたかも、2-3歳の幼児が父親の手をしっかりと握っているかのようで、父の手が子の小さな手をつかんでいなければ、元も子もありません。そして、日本人の信仰心というのは、選ぶというよりも、それ以上に「付け足す」というものです。多神教の信仰心なので、いくつもある神々の上に、キリストが付け加えるという意識です。ですから、状況が悪くなると、「いつでも躓いて、やめてやる」という姿勢に満ちています。自分の今までの生きている在り方に、キリスト教が加わっており、その世界で何か嫌なことが起これば、自分の生活様式に戻ります。けれども、なぜかキリストの名は呼び続けるのです。こうやって信仰の形骸化が起こります。

自分が主の名を呼び求めたのですが、その前に主が、世の初めから子羊のいのちの書に自分の名を書き記しておられました。自分が主を知る前に、自分自身が主に知られています。主の選定の主権があって、初めて私たちが実を結ばせることができるのです。

次に、「任命しました」という言葉ですね。誰が認めたのかと言えば、主ご自身が認められたのです。パウロが、エルサレムから来たのだとする教師たちが、自分たちは使徒たちのお墨付きだと

して、パウロの語る恵みの福音に反対したのですが、パウロはこのように言って、ガラテヤ人への手紙を始めています。「1:1 人々から出たのではなく、人間を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によって、使徒とされたパウロ」人に認められるのではなく、任命された神を喜ばせようとしています。

このようにして選ばれ、任命を受けるのは、二つの目的があり、一つは「あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため」とあります。主によって遣わされて、その行ったところで実が残るようにするためです。ここで大事なのは実が結ばれるだけでなく、その実が残ることです。多くの、実と呼ばれているものが、いつに間にかしおれてしまうことがあります。それでも、しっかりと残る場合もあります。イエス様が、二つの家の喩えで、一つは砂の上、もう一つは岩の上に建てた家ですが。洪水が来ると、岩の上に建てた家が残ります。それは、みことばを聞くだけでなく、それを行ったからだということです。表面的に多くの人が救われているように見えても、その実が残るかどうかは大事です。

もう一つの目的が、「あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるため」です。遣わされた者たちが、主の命令に従う中で求めるものをすべて、父が与えられることによって、そしてイエス様の名によって願うので、イエス様があがめられます。

17 あなたがたが互いに愛し合うこと、わたしはこれを、あなたがたに命じます。

このように遣わされていく中で、なおも彼らは互いに愛するというに徹することを、命じられています。数々の働きをそれぞれの福音宣教者が行っていった、その中で試されるのはへりくだりです。働き手の中で争いや対立が起こりがちです。ちょうど、弟子たちがイエス様の前で、誰が最も偉いのか言い争いをしたようにです。けれども、いつまでも彼らはチームで動いている、仲間で動いているということが大事です。

2A 世の憎しみ 18-25

1B 世から選り出された者 18-20

18 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。

ここから、世との関係は入ります。初めに、イエス様の内に留まるという、イエス様との関係を語られ、次に互いに愛し合いなさいという、互いに対する関係について語られました。そして世との関係は、実に「憎しみ」なのだということです。イエスを愛する共同体は、世からは正反対の仕打ちを受ける、憎しみを受けるということです。ここで大事なことは、私たちが受ける憎しみというのが、自分を憎んでいるというものではない、ということです。「あなたがたよりも先にわたしを憎んだ」というところです。

19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。

イエス様は、「3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」と言われました。その世に対する愛によって愛されて、それで私たちは救い出されました。したがって、世としては自分たちのものであった者が、突然、取られていったということになります。先にイエス様が、「わたしがあなたがたを選んだ」と言われましたが、それは同時に、「わたしが世からあなたがたを選び出した」ということです。これは、「聖別された」ともいう言葉です。数ある者たちの中から別たれて、神の所有のものになったということです。

分かり易く話すために、両親の例を挙げましょう。彼らは、私がクリスチャンになるという言葉、消極的ながらも受け入れてくれました。ところが、数か月後、私は両親と姉を自分のバプテスマ式に招きました。私が水の中に入り、バプテスマを受けた時に、両親は思ったそうです。「イエスが、清正を私たちから取っていった。」と。これまで直接的に私と、血肉においてつながっていたものが、私がイエス様のものにされたことを、目で見る形で目撃したので、その衝撃が走ったのです。アメリカでは、麻薬をやっていた女の子がイエス様を信じて、やめることができたという話があって、父親が、「昔の娘のほうがよかった」という感想をもらいましたが、それも同じです。まだイエスを信じる前の娘のほうが理解できたからだそうです。

だから、これは個人的なことではなく、実に霊的なもの、霊の戦いに属するものです。世は悪い者の支配の中にあります。キリストにあって、神に生まれた者となりました。すると、世は神に生まれた者を憎むようになります。私たちの生きている日本は、和を大事にしますから、あからさまに憎しみを表すことは少ないでしょう。けれども、イエスを主とするという決断と献身をする中で起こってくる、数多くの不便や試練、困難は、まさに、世の憎しみという範疇に入ります。人にどう見られるか？ということがとても大切になるので、あからさまな迫害を受ける前に、受けないように忖度して、自らイエス様に言われたことに反することを選び取ってしまいます。なので、迫害が起こっていないように見えますが、実は迫害の前にそれを避けてしまっているからです。

20 しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。

イエス様が迫害されたのであるから、その僕である使徒たちも迫害される、ということです。以前にも何度となくイエス様は語っておられたので、ここでも思い起こさせています。ここは、ある意味で慰めです。迫害者は、いろんなことを言ってキリスト者を責めます。あなたのこれが良くない、あ

れが良くないとして、相手は自分の弱く見えるところを良く知っていますから、そこを突いてきます。

私の友人の若い働き手が、教会で十代の子を海外の宣教旅行の企画を担当していました。そのうちの親の一人かから、「彼は、神学校を出てそのまま教会をやっているから、社会経験がないから、そんな世間知らずなことができるのだ。」と言ったそうです。その国について、その親よりも彼のほうがよっぽどよく知っていますから、理不尽なことはよく知っています。けれども、彼は弱みを感じていました。一般企業に入ることなく大学卒業後、そのまま神学校に行ったからです。相手は、自分に欠けたところ、弱みを良く知っているの、あたかも自分に過ちがあるかのように話してきますが、そうではなく、本人が、主ご自身の働きを受け入れたくないからそう言っているのです。

イエス様は、「彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります」と言われます。イエス様が、忠実にご自分の言葉を伝える使徒たちに対して語っておられます。彼らの語る言葉は、彼らの言葉ではなく、主の言葉なのです。だから、もしイエスの言葉を受け入れているのならば、あなたがたの言葉も受け入れるはずだ、ということです。

2B 知って迫害する者たち 21-25

21 しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。

今、イエス様は、ご自身を迫害して、これから死に追いやるユダヤ人指導者たちのことを語っておられます。彼らは、使徒たちに聖霊が与えられて、大胆にイエスの御名を宣べ伝える時に、同じように迫害します。彼らは神の名によってそれを行うのですが、それで彼らが神を知っているかというそうではなく、むしろ神を知らないからそんなことをするのだということです。イエス様は、何度となく「知る」という言葉を使っておられますね。「主よ、主よ」という者たちに対して、「マタ 7:23 わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」と言われたところの「知る」です。これは、関係性の知るということであり、人格的に、靈的にイエス様を知っているということです。知識を越えた知識です。

22 もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今では、彼らの罪について弁解の余地はありません。23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいます。24 もしわたしが、ほかのだれも行つたことのないわざを、彼らの間で行わなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今や、彼らはそのわざを見て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。

ユダヤ人指導者は、イエスが語られて、また多くのわざを見せて、それを聞いて、見ていながら、なおのこと憎んでいます。これは罪が重いです。「ルカ 12:48 多く与えられた者はみな、多くを求め

られ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。」主は彼らに対して、何度となく、わたしが神のわざを行っているのならば、どうして、信じないのか？と問われました。その証しを見て、聞いて、それでなおのこと反発しているのですから、その罪は大きいのです。私たちの周りに、まだ知らずにいて反対する人がいても、それは神を知らないから仕方がないとは言えると思います。けれども、それと故意に、知っていながらむしろ知っているから、確信的に、巧妙に惑わす、というようなことをします。

主は、注意深く、彼らは「わたしの父をも憎んでいます」と言われました。なぜなら、彼らは父なる神を敬うと言っていたからです。神の名によってイエス様を迫害したからです。けれども、イエスさまははっきりと、「8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者」と呼ばれました。なぜなら、イエス様に対する殺意に満ちていたからです。ですから、使徒ヨハネは、教会の中においても、陥ってはならない偽りについて警告しています。「Iヨハ 3:13-15 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません。」自分は神を愛していると言いながら、兄弟を憎んでいれば、永遠のいのちが留まることはない、はっきりと言っています。

25 これは、『彼らはゆえもなくわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。

主は、ユダヤ人が主ご自身をこのように故もなく憎むことが、神が予め知っておられて、そのことも支配しておられることを、詩篇にある言葉(35:19,69:4)から説明しておられます。私たちはとかく、悪がはびこる時に、神の善の世界と、悪の世界が拮抗しているかのように思っていますが、そうした二元論は聖書には書いていません。このような悪をも神のご計画には織り込み済みです。

3A 聖霊の証し 26-27

26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてください。27 あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。

主は、励ましておられます。このような迫害があっても、聖霊の助けがあることを語っておられます。彼らはイエスを憎み、父をも憎んでいるのですが、使徒たちには、父から出る聖霊によって、イエス様を証しすることができるようになります。彼らの経験や能力を越えて、その力強い働きがあるのです。イエス様は、ルカ 12 章で、彼らが迫害されることを予期して、「恐れてはなりません」と言われながら、聖霊が教えてくださる約束をくださいました。「12:11-12 また、人々があなたがた

を、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

イランの地下教会の兄弟姉妹の証言を、動画で見ることができますが、顔を隠して一人が、大学のキャンパスで伝道する働きをしています。「証しをしたら、迫害される。それが怖いかと問われたら怖い。けれども、聖霊がついてくださっている。」というようなことを言っていました。私たちに、迫害が怖いというのは偽りのない気持ちです。しかし、数ある忍耐の証しは、こうした聖霊の力によるものだということを思い出すとよいでしょう。

そしてイエス様は、「あなたがたも証します」と言われました。それは、彼らはずっと共にイエス様といましたから、彼ら自身も人から聞いたことではなく、真性の証人、第一目撃者なのだということです。ペテロとヨハネがサンヘドリンで被告人として立っている時に、その審議の中で「使徒 4:13 二人がイエスとともにいたんだということも分かってきた。」とあります。

次回 16 章は、この話の続きで、ユダヤ人宗教指導者の迫害と、それから聖霊の世に対する働きについて、語り続けられます。